10 古典の基本(1)

学習のねらい
・歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改める際のきまりを知る。
・文章中から会話文を見つけられるようにする。

ポイント

1 古文の特色

(1) **歴史的仮名遣い**

古典で用いられる歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直すルールを押さえる。

▼**語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」→「わ・い・う・え・お」**

・竹取の翁といふものありけり。 ← いう

・あはれ今年の秋もいぬめり ← あわれ

▼**「ゐ・ゑ・を」→「い・え・お」**

・野分の朝こそをかしけれ。 ← おかしけれ

・こゑ聞く時ぞ秋は悲しき ← こえ（声）

▼**「ぢ・づ」→「じ・ず」**

・天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ（通い路） ← 閉じよ

・妻の嫗にあづけて養はす。 ← あずけて

▼**「ア・イ・エ段の音＋う（ふ）」**

①「au」→「ō」　・同じやうにもあらぬ ← 同じよう　「yau」→「yō」

②「iu」→「yū」　・うれしうはべる ← うれしゅう　「siu」→「syū」

③「eu」→「yō」　・けふ九重ににほひぬるかな ← けう→きょう　「keu」→「kyō」

(2) **古今異義語（現代と意味の異なる語）**

古典では、現代とは違う意味で用いられる言葉がある。古典での意味に注意して覚える。　※重要古語については巻末「付録　古典の知識」参照。

▼**あした—朝・翌朝**

▼**をかし—風情がある**　「野分のあしたこそをかしけれ。」（嵐の（過ぎ去った）翌朝は風情がある。）

▼**ありがたし—めったにない**　「ありがたきもの、舅にほめらるる婿。」

▼**うつくし—かわいらしい**　「小さきものはみなうつくし。」

▼**年ごろ—長年の間**　「年ごろ思ひつること、果たし侍りぬ。」（果たしました。）

▼**やがて—そのまま**　「薬も食はず、やがて起きも上がらで病み伏せり。」

(3) **係り結びの法則**

強調や疑問、反語の意味を表すときに、文の途中に「**ぞ・なむ・や・か・こそ**」という語（助詞）がくることがある。その場合、文末の言葉の形が変わる。この決まりを「**係り結びの法則**」という。

例
（通常の文）　入道殿おはす。　入道殿がいらっしゃる。
（係り結びの文）　入道殿や おはする。　入道殿はいらっしゃるか。（疑問）
係り結び

2 会話文の見つけ方

会話文が終わったすぐあとには、「**と（言ふ・申す・のたまふ）**」「**とて**」「**など（言ふ）**」の語がくることが多いことに注目する。

例
「この戸あけ給へ」と、たたきけれど、……
（訳）「この戸をあけてください」と、たたいたが、……

Sample

演習問題 A

1 次の古文とその現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

春はあけぼの。㋑やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、㋺蛍のおほく飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、①ほのかにうち光りて行くも②をかし。雨など降るもをかし。

【現代語訳】

春は夜明け（がよい）。だんだんと白くなっていく山ぎわの空が、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている（のがいい）。

夏は夜（がよい）。月の（眺めのよい）頃はいうまでもない、（月が出ていない）闇の夜もやはり、蛍がたくさん飛び交っている（のがいい）。また、ただ一匹二匹と、ほのかに光って飛んでいくのも［　　］。雨などが降るのも［　　］。

（清少納言「枕草子」第一段より）

□(1) ～～線㋑・㋺の歴史的仮名遣いを、現代仮名遣いに直しなさい。

㋑［　　］　㋺［　　］

□(2) ――線①「ほのかにうち光りて行く」の主語を古文中から抜き出して書きなさい。

［　　］

□(3) ――線②「をかし」の意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　おもしろい　　イ　趣がある

ウ　楽しい　　エ　はなやかだ

［　　］

2 次の古文とその現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

①つれづれなるままに、日暮らし、硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、②あやしうこそものぐるほしけれ。

【現代語訳】

手持ちぶさたですることもないままに、一日中、硯に［　　］、心に浮かんでは消えていくつまらないことを、とりとめもなく書きつけていると、不思議なほど気持ちがおかしくなりそうである。

（兼好法師「徒然草」序段より）

□(1) ――線①「つれづれなるままに」からわかる作者の様子として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　多忙　　イ　落胆　　ウ　満足　　エ　退屈

［　　］

□(2) ――線②「あやしうこそものぐるほしけれ」について、

① 歴史的仮名遣いを、現代仮名遣いに直し、平仮名で書きなさい。

［　　］

② この部分に用いられている表現技法として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　枕詞　　イ　序詞　　ウ　係り結び　　エ　体言止め

［　　］

□(3) ［　　］に入る言葉を、現代語で書きなさい。

［　　］

Sample

3 次の古文とその現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

*祇園精舎の鐘の声、*諸行無常の響あり。*娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も①久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も②遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

【現代語訳】

祇園精舎の鐘の音には、諸行無常の響きがある。娑羅双樹の花の色は、盛者必衰の道理を表している。おごりたかぶっている人も□、（それは）まるでただ春の夜の夢のようである。力の強い者も□、（それは）全く風の前の塵と同じである。

（「平家物語」より）

（注）祇園精舎…昔、インドで釈迦のために建てられた寺。
諸行無常…すべてのものは常に移り変わり、一定ではないということ。
娑羅双樹…インド原産の木。釈迦が亡くなったときに二本ずつ生えていた木が、一本ずつ枯れたという。

□(1) ――線①「久しからず」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア たくさんはいない　イ 長続きはしない
ウ 久しぶりではない　エ 長生きをしない

〔　　〕

□(2) ――線②「遂には滅びぬ」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 結局は滅びてしまう　イ 決して滅びない
ウ 滅ぶかもしれない　エ 今にも滅びそうだ

〔　　〕

□(3) この古文の特徴として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 作者の見たものが具体的に述べられている。
イ ひらがな中心のやわらかい印象の文体である。
ウ 作者の想像力によって作られた内容である。
エ 漢語が多用されたリズムのある文章である。

〔　　〕

4 次の古文とその現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

*中納言㋑参りたまひて、御扇奉らせたまふに、「隆家こそいみじき骨は得てはべれ。それを、張らせてまゐらせむ㋺とするに、おぼろけの紙はえ張るまじければ、求めはべるなり、と申したまふ。

【現代語訳】

中納言が参上されて、扇を献上されるときに、隆家は素晴らしい（扇の）骨を手に入れております。それに（紙を）張らせて差し上げようと思うのですが、普通の紙は張ることができないので、（骨に見合った紙を）探しているのですと申された。

（清少納言「枕草子」第九十八段より）

（注）中納言…中納言隆家。清少納言が仕える中宮定子の弟。

□(1) ――線㋑「参りたまひて」、㋺「まゐらせむ」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

㋑〔　　〕　㋺〔　　〕

□(2) ～～線「隆家こそいみじき骨は得てはべれ」の中の「係り結びの法則」の関係にある語を抜き出しなさい。

〔　　〕→〔　　〕

□(3) ――線のカギカッコから始まる会話文の終わりはどこですか。古文中から終わりの五字を書き抜きなさい。（句読点・記号は含まない。）

□□□□□

Sample

演習問題 B

1 次の古文とその現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

ころは二月十八日の酉剋ばかりの事なるに、①をりふし北風激しくて、磯うつ浪も高かりけり。舟は、ゆりあげゆりすゑ、ただよへば、扇も串にさだまらずひらめいたり。②おきには平家舟を一面にならべて見物す。陸には源氏くつばみをならべて是を見る。いづれもいづれも晴ならずといふ事ぞなき。与一目をふさいで、④「南無八幡大菩薩、我国の神明、日光権現、宇都宮、那須のゆぜん大明神、願はくは、あの扇のまんなか射させてたばせ給へ。これを射損ずる物ならば、弓きり折り自害して、人に二たび面をむかふべからず。いま一度本国へむかへんとおぼしめさば、この矢はづさせ給ふなと、心のうちに祈念して、目を見ひらいたれば、風もすこし吹きよわり、⑤扇も射よげにぞなったりける。

【現代語訳】

時は二月十八日の午後六時のことであったが、□北風が激しく（吹いて）、岸に打ち寄せる波も高かった。舟は、揺り上げられたり揺り落とされたりして（ゆらゆらと）漂っているので、（竿の先の）扇も竿に固定されず揺れ動いている。沖では平家が舟を（海上）一面に並べて見物している。陸では源氏が馬のくつわを並べてこれを見ている。どちらもどちらも□。与一は目を閉じて、「南無八幡大菩薩、我が故郷の神々である、日光権現よ、宇都宮大明神よ、那須の湯泉大明神よ、□、あの扇の真ん中を射させてくださいませ。もしもこれを射損じれば、弓を切り折って自害をして、二度と人と顔を合わせるつもりはありません。もう一度（私を）本国へむかえようとお思いになるのならば、この矢をお外しにならないでくださいと心の中で念じて、目を見開いて見ると、風も少し吹き弱まり、扇も射やすそうになっていた。

（「平家物語」より）

□(1) ——線①「をりふし」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 最近　イ ちょうど
ウ さっきまで　エ 本当ならば

〔　　〕

□(2) ～～線㋑～㋩の歴史的仮名遣いを、現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

㋑〔　　〕　㋺〔　　〕
㋩〔　　〕

□(3) ——線②「おきには平家舟を一面にならべて見物す。」と表現の上で対になっている一文を書き抜きなさい。

〔　　〕

□(4) ——線③「晴ならずといふ事ぞなき」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 晴れがましくない
イ 晴れることはない
ウ 晴れていなくてよい
エ とても晴れがましい

〔　　〕

□(5) ——線④のカギカッコから始まる会話文の終わりはどこですか。古文中から終わりの五字を書き抜きなさい。

〔　　〕

□(6) ——線⑤「扇も射よげにぞなったりける」に用いられている表現技法を書きなさい。

〔　　〕

Sample

2 次の古文とその現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

仁和寺にある法師、①年よるまで、石清水を拝まざりければ、②心うく覚えて、ある時思ひ立ちて、ただひとりかちより詣でけり。極楽寺・高良などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。さて、㋑かたへの人にあひて、③「年比思ひつること、果し侍りぬ。④聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけん、⑤ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、㋺山までは見ずとぞ言ひける。

少しのことにも、⑥先達はあらまほしきことなり。

【現代語訳】

仁和寺にいる法師が、□、石清水八幡宮をお参りしたことがなかったので、□、ある時思い立って、たった一人徒歩で参拝した。（山の麓にある）極楽寺や高良神社などを拝んで、これだけだと思いこんで帰ってしまった。そして、（かたわらの）仲間に向かって、「長年の間思っていたことを、果たしました。聞いていたのにまさって、大変尊くいらっしゃいました。それにしても、お参りしている人々がすべて山へ登っていたのは、何事があったのでしょう、□、石清水八幡宮へ参拝することこそが本来の目的であると思って、山までは見ませんでしたと言った。

ちょっとしたことにも、□。

（兼好法師「徒然草」第五十二段より）

□(1) ——線①「年よるまで」を現代語に訳しなさい。

〔　　〕

□(2) ——線②「心うく覚えて」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　うきうきした気分で　　イ　残念に思って

ウ　覚えていなかったので　　エ　孤独だと思って

〔　　〕

□(3) ～～線㋑・㋺の歴史的仮名遣いを、現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書きなさい。

㋑〔　　〕　㋺〔　　〕

□(4) ——線③のカギカッコから始まる会話文の終わりはどこですか。古文中から終わりの五字を書き抜きなさい。

〔　　〕

□(5) ——線④「聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ」とありますが、これは法師が何について抱いた感想ですか。次の□a～□cにあてはまる言葉を、古文中からaとcは三字、bは二字で書き抜きなさい。

□aや□bを□cと勘ちがいして抱いた感想。

a〔　　〕

b〔　　〕

c〔　　〕

□(6) ——線⑤「ゆかしかりしかど」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　知りたかったのですが　　イ　楽しそうでしたが

ウ　高貴な様子でしたが　　エ　登りはしましたが

〔　　〕

□(7) ——線⑥「先達はあらまほしきことなり」の現代語訳として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　前もって自分でよく調べることが必要だ

イ　手間をかけることを嫌がってはいけない

ウ　その道の案内役がいてほしいものである

エ　過ちをおかすことを恐れないほうがいい

〔　　〕

Sample

故事成語(1)

ポイント

★故事成語…故事（昔から言い伝えられた事柄や物語）を元に、特別な意味を表す語句。

例　推敲

故事＝自作の詩の一節を「推す・敲く」のいずれにするか迷っていた詩人が韓愈の行列にぶつかった。わけを聞いた韓愈は「敲く」の方がいいとアドバイスした。

意味＝詩句や文章を練ること。

※故事と意味とを、混同しないこと。

▼覚えたい故事成語の意味

矛盾＝つじつまが合わないこと。
蛇足＝余計な物を付け加えること。その物。
五十歩百歩＝似たりよったりで違わないこと。
漁夫の利＝第三者が利益を横取りすること。
蛍雪（の功）＝苦学すること。その成果。
守株＝古い習慣を守り、融通がきかないこと。
他山の石＝他人の言行や失敗を、自分を磨く参考や助けにすること。
虎の威を借る狐＝強者や権力者の威光をかさにきていばること。その小人物。
温故知新＝古いことを学ぶことで、新しい知識や考えを得ること。
出藍の誉れ＝弟子が師匠よりも勝ること。
四面楚歌＝周りを敵に囲まれ孤立すること。
背水の陣＝あとにひけない決死の態勢。

1 次の故事からできた成語を、それぞれの故事の中の言葉を使って、（　）内の字数で書きなさい。

□(1) 男たちが賭けをして、最初に蛇の絵を描いた者が賞品の酒を飲むことにした。最初に描きあげた男が、調子に乗ってその蛇に足を描き足していると、次に描きあげた男が「蛇に足などないぞ」と言って酒を飲んでしまった。
（二字）〔　　〕

□(2) 木の株にぶつかって死んだ兎を手に入れて味をしめた男が、二度目の幸運を期待してその株をずっと見守っていて、笑い者になった。
（二字）〔　　〕

□(3) 男が「自分の盾はどんな矛もとおさず、矛はどんな盾でもとおす」と言ったが、「その矛でその盾をついてみろ」と言われて、返答ができなかった。
（二字）〔　　〕

□(4) 貧しくて灯火の油が買えなかった車胤は、蛍を集めてその光で書を読み、同じく孫康は雪の明かりで書を読んだ。
（二字）〔　　〕

□(5) 孟子が「戦いの最中に、百歩逃げた兵士を五十歩逃げた兵士が『臆病者め』と笑ったらどうでしょうか」と王に問い、隣国の王より優れていると言う王に、大差がないことをさとした。
（五字）〔　　〕

2 次の――線の内容にあてはまる故事成語をあとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

□(1) 彼は僕の歌を笑うけど、彼の歌だってどっちもどっちさ。聞いていられないよ。〔　　〕

□(2) あの子は、父親が有力者だからといって大きな顔をしているけど、みっともないね。〔　　〕

□(3) ホームルームでの失言が原因で、クラスじゅうのみんなが僕を責めるんだ。〔　　〕

□(4) 家を新築したが、地下室は無駄だった。湿気があって使いものにならないよ。〔　　〕

□(5) 君の作文は決まりを無視したいい加減なもので読むに堪えない。〔　　〕

ア　蛇足　　イ　四面楚歌
ウ　五十歩百歩　　エ　杜撰
オ　虎の威を借る狐

3 次の故事成語を用いて、短文を作りなさい。

□(1) 矛盾〔　　〕

□(2) 推敲〔　　〕

Sample